

## 女性が動く、地域が動く：ファシリテーターとして奔走する日々

立教大学社会学部，立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 教授  
萩原 なつ子

環境，ジェンダー，NPO を専門とし，地域や女性を動かすべく，ファシリテーターとして日本中を飛び回っています。本稿では最近の私の主な活動を2つ報告しましょう。1つめは「としま F1会議」です。これは「日本創生会議」（座長・増田寛也氏）が発表した全国896の「消滅可能性都市」に東京23区で唯一指摘を受けた豊島区が，F1世代（F=Female，1=20代～30代，つまり20～30代の女性を意味するマーケティング用語）の現状を把握し，声を施策に反映することを目的に設置した会議です。私は豊島区在住，在勤のみなさん，そして豊島区役所職員と共に女性に優しい（誰にとっても優しい）まちづくりをめざす「としま F1会議」の座長を務めました。そして2つめは，「としま F1会議」から出された女性たちの提案をもとにベネッセコーポレーション，立教大学，豊島区が協働で連続開催している妊娠・育児中の共働き夫婦を主な対象とした学びの場「ママtomo パパtomo カレッジ」（立教大学&たまひよ企画共催）です。

### としま F1会議

2014年「日本創生会議」で，東京23区で唯一「消滅可能性都市」としてあげられた豊島区の依頼を受けて，「としま F1会議」の座長を引き受けた。2014年7月19日のキックオフミーティングから翌2月12日の予算報告会まで，さながらF1レースのように駆け抜けた。ヘアピンカーブもなんのその，果敢にアクセルを踏み続けたドライバーは行政職員も含めて32名。最終的には「としま F1会議」の政策提案の中から11事業8,800万円の予算がつき，マスコミにも大きく注目された充実した会議だった。「若い女性の声を直接予算に反映したのは，区政史上初め

て」と高野区長。それはひとえに，消滅という言葉に衝撃を受け，危機感と問題意識を共有し，「まちづくりを良くするのは誰？ 私でしょう！」という当事者意識をもって積極的に関わったメンバーたちの熱意の賜物である。

座長を引き受けるからには従来の審議会形式の会議にはしたくなかった。「役所がやるような，ただの会議じゃおもしろくない」，である。消滅可能都市として名前があがった場合，ありがちな議論は，消滅都市にならないようするために人口減少に歯止めをかけるべく，出生率の向上や少子化対策といったもの。これでは，産めよ増やせよといった旧態依然たる会議となる可能性があり，私が大事にしている女性の多様な生き方，価値観に寄り添ったものではない。そこで，女性たちがどのようなステージにあっても，またどのようなライフスタイルを選んだとしても「住み続けたい」と思える，日常生活をおくるにふさわしい場として「選ばれるまち」を目指す会議にと，「6つのこだわり」を提案した。

1. としま F1会議のメンバーは，当事者意識をもって積極的に取り組んでくれる女性を募ること。
2. 会議で議論するテーマは，としま F1会議のメンバーが決定すること。
3. 行政側が作成した素材をもとにする従来の審議会形式のやり方をしないこと。
4. 調査・研究に基づいた裏付けのある提案をすること。
5. 行政職員も，としま F1会議のメンバーとして議論に加わること。
6. としま F1会議の意見を聞き置くという形式的なものではなく，としま F1会議の提案を次年度の豊島区の事業予算に反映させ，次年度から具体的な施策として事業化できるようにすること。そのために，秋の予算編成の時期に提案を間に合わせることに。

特に「6. 番目」については，実現することに最も拘った

#### Natsuko HAGIWARA

〔著者紹介〕（略歴）山梨県生まれ。明治学院大学文学部英文学科および社会学部社会学科卒業。お茶の水女子大学大学院家政学研究所修士。博士（学術）。(財)トヨタ財団アソシエイト・プログラム・オフィサー。東横学園女子短期大学助教授。宮城県環境生活部次長，武蔵工業大学環境情報学部助教授を経て，現職。

〔専門分野〕環境社会学，ジェンダー論，非営利活動論等が専門。

ことだった。関わった人たちの貴重な時間を使い、調査・研究をもとに提案を行っても、それが区の予算に反映されず事業化もされなければ、せっかくのこのとしまF1会議も意味がなくなってしまう。「6. 番目」の実現を担保するために、月に一度の会議では必ず各チームにプレゼンテーションを課し、自分には具体的な企画提案に結びつける会議マネジメントを心がけた。同時に区長には会うたびに「必ず予算をつけ事業化してくださいね、こちらも頑張りますから」と念押しをし、また行政管理職員にもゆるやかなプレッシャーを与え続けた。もちろん最終決定は議会が行うが、まずは執行部提案に反映されないことには始まらない。このプロセスデザインは、2001年～2003年まで宮城県環境生活部次長として2年間ではあるが行政に関わった経験が生かされたと思う。私を招聘してくれた当時の宮城県知事浅野史郎氏に感謝している。

F1とは、Female（女性）の1（20代～30代の女性）を意味するマーケティング用語だが、私たちはこれに自動車レースのF1レースのformulaに加えてfuture 未来、fortune 幸福の意味も込めた。「としまF1会議」の委員の発掘を目的に、キックオフイベント「100人女子会」を開催。このイベントはF1層（元F1、自称F1含む）を集めて、豊島区に対する現状イメージ、望ましい未来イメージを「ワールド・カフェ」の手法で引き出す目的で開催した。

何をするにも、トップダウンではなく、当事者たちが当事者意識をもって全力で真剣に取り組み、提案し、それを行政が実現させていくことが大切だ。このような状況下、効果的な対話手法が「ワールド・カフェ」である。この手法はJuanita Brown（アニータ・ブラウン）氏とDavid Isaacs（デイビッド・アイザックス）氏が1995年に開発・提唱し、カフェで議論しているかのように、メンバーの組み合わせを変えながら4～5人単位の小グループで話し合いを続けることで、あたかも参加者全員が話し合っているような効果が得られる手法である。具体的には全体に与えられたテーマについてまず、各テーブルで議論する。その後、テーブルホスト1名以外は他のテーブルに移動し、移動先のテーブルホストから前のグループの議論の要約説明を受ける。そしてそれをもとに議論を深める。それを繰り返した後、テーブルホストが参加者全員にまとめの報告を行う、というスタイルである。

この会議を通して、行政は地域住民に一方的にサービスを提供し、地域住民は一方的に行政からのサービスを受けるといった関係ではなく、行政と地域住民がともにまちづくりをする主体として協力し合う関係であることを、お互いが実感することができたのではないかと自負して

いる。詳細は『としまF1会議 消滅可能性都市270日の挑戦』（生産性出版）に詳しい。ぜひ、お読みいただきたい。

## ママ tomo パパ tomo カレッジ

「ママ tomo パパ tomo カレッジ」は妊娠前、妊娠中から育休中、復帰後のワーキングマザーとそのパートナーに向け、立教大学という学びの場を舞台に、夫婦で協力し合って子育てとキャリアを両立していくための実践的な学びの機会を提供する取り組みである（共催：ベネッセコーポレーション）。きっかけは、「としま100人女子会」や「としまF1会議」で、何歳になっても、結婚しても子どもがうまれても「学び続ける女性」でありたいという意見が出されたことにある。そこで「としまF1会議」に関心を持ち、オブザーバー参加していたベネッセと共催で2015年7月に、学びたいママのための「マナmama100人会議」をはじめて開催した。その後、有志参加者と検討を重ね、2016年3月5日（土）には育休復帰するママのための「WATASHI カレッジ：育休復帰準備完璧1Day 講座」を開催。当日は203名のママとパパが集まり大盛況！ ママたちは「育休復帰をチャンスに変える！」をテーマに、育児脳から仕事脳に切り替える「実践的ロジカルシンキング」や「セルフブランディング」などを学んだ。後半の「先輩ママのパネルディスカッション」では会場は熱気にあふれ、多いに盛り上がりを見せた。同じ状況下のママたちが意見交換するなか、話が尽きない様子で意気投合し、連絡先を交換している姿もあった。他方、パパと子ども講座では、初めて赤ちゃんと一緒に過ごすパパもいる中、ママの心配をよそにパパたちは講師の先生から「パパならではの子育て法」を学び、子どもたちとパパの笑顔が溢れる素敵な時間となった。

第2弾として秋カレッジを2016年9月3日（土）、「家族の未来希望図（family will）をつくろう」をテーマに開講した。3月の講座で即日満席となった「パパと子ども講座」は定員を倍増して募集したところ、総勢400人を超えるパパ、ママと赤ちゃんが参加してくれた。講義内容は「固定観念にしばられない！ 選択とプロセスデザイン」のキーノートスピーチに続き、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科提供講座「『日本スターバックス物語』に学ぶフォロワーシップ論」、「ワーキングマザー必修予測される未来から考えるリスクマネジメント」。その間、ベネッセ提供のパパ向け講座として「赤ちゃん、子どもが喜ぶパパ遊び」や「子どもが大人になる未来予想求められる能力」を開催した。午後からはお待ちかねの「先輩ママ、パパトークセッション」。今回は「保活・園選び」と「両立・キャリア形成」の2つのテーマのもと、

パパもママも赤ちゃんも熱心に耳を傾けていた。

東都生協さんからはトラックいっぱいのビスケットやドリンクの差し入れをいただいた。立教大学と実践女子大学の学生のボランティアの活躍もあり、盛況のうちに講座は終了した。

現在、第2回の参加者アンケートをもとにすでに来年

3月の講座のプランニングに入っている。文化や哲学、ダンスなど、関心は多岐にわたる。企画会議が白熱することまちがいなさそうだ。今後、全国の大学で「ママtomo パパtomo カレッジ」講座を開催したいと思っている。関心をお持ちになられた方は、ぜひ、ご一報いただきたい。